
憑乃宮少女の現代《モダン》

右下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑乃宮少女の現代^{モダン}

【Nコード】

N2604J

【作者名】

右下

【あらすじ】

憑乃宮少女を中心に訪れる、非現実的な者達。

妖怪に幽霊、怪物に精霊と、もうなんでも来い状態！

こうして憑乃宮少女の住む現代常識が、刻々と変化していく。

それなのに『ほのぼの』とした、憑乃宮 歩の日常です。

【一話】『憑乃宮少女とサンタクロース』

これは、私がここ数年に体験し実感した、奇跡のような奇跡じゃないような、運がいいような運が悪いような、神様の悪戯のような神様の悪戯じゃないような、ちょっと可笑しいお話です。

まずは最初のお話。

§
§
§
§
§
§
§
§
§

鉛色に染まった空、ピンと張り詰めた冷たい空気。

吸っては吐き吸っては吐き、その都度出る白い息に私は笑ってしま
った。

「なぐに一人でニヤニヤしてんの？ 寂しすぎておかしくなっちゃったの？」

「え？ 違うよ、ただ白い息って面白いなあ〜って考えてただけ」

「はあ・・やっぱしあんたの事だから、また変な事言いだすかと思えば面白い？ 毎年この時季になると嫌でも見れるじゃない」

深いため息と一緒に、白い息と正論が帰って来た。

「ん〜そうだけど、さ。裏を返せばこの時季でこそ見れるものじゃない？ それにさ、白い息をブア〜って出すと怪獣みたいでしょ？ あはは、思わず笑っちゃうよ〜」

そう、私は小さく笑って言った。

「ば〜か、裏を返す必要なんてないっつーの。大体さ〜今時にね、しかも高校二年生にもなって『怪獣みたいだ』『白い息面白い』な〜んて歩、^{あゆむ}あんたどこまでおめでたいの〜？ すでに新年明けちゃいました？」

「え〜、いくらなんでも酷〜い」

口を尖らせながら私は言った。

「ま、今日の日に限ってそんな事考えて笑えるあんたを、私は素直に尊敬するよ。あ〜あ、ここに美少女と正月少女が二人寂しく歩いてるのに、どうして世の男子諸君は喰いつかないのかねえ。都市伝説だわ、こりゃ」

「正月少女で悪かったですね〜だ」

ぷいっと顔をそらし、ある事を思い出した。

あ、そうだ。今日は世に言うクリスマスであった。

街にカップルが溢れ、愛を育む。家庭を持つ者は早く自宅に帰宅す

るため、無意識に歩く速度がいつもにも増して速くなる。そして子供たちは、サンタさんからのプレゼントを心待ちにしている。

「ねえ霞ちゃん、いきなりなんだけどさ、霞ちゃんかすみはサンタさんって信じてる？」

「今度は何を言い出すかと思えば、サンタさん信じてるう？ 信じてないわよ、だって」

霞ちゃんの言葉が途切れる。

「だって？」

すかさず私が聞き返すと。

「だって、いくら願ってもサンタの野郎、あたしに彼氏の一人すら持ってこないんだもん」

と、真顔で返された。

「ははは・・・」

「歩はどうなのよ？ 信じてそうだけど、一樣訊いたげる」

数秒あけて、私は鼻歌を歌うような感じで言った。

「うん」

そして私は、軽い笑みを浮かべながら、はっきりと答えた。

「信じてるよ。サンタさん」

言うまでもなく、霞ちゃんの顔は呆れかえっていた。

$$\begin{array}{c} \S \\ \S \\ \S \\ \S \\ \S \\ \S \\ \S \\ \S \end{array}$$

霞ちゃんと別れ、いつも通りの見なれた街路樹を歩き、いつも通り自宅に着いた。

「ただいま」

「あ！おかえりなさい！」

玄関を開け、すぐ目に飛び込んだのは、今年5歳になった妹の真衣だった。

真衣は、いつもより元気に私に向かって『おかえり』を言っと、トコトコと私に歩み寄って来た。

「ねーねー！歩お姉ちゃん！今日サンタさんが来るよ！」

興奮気味に、真衣は私にサンタさんの登場予告をした。

「うん、そうだね。真衣ちゃんはどうな物をお願いするのかな？」

靴を脱ぎ、二階の自室へ上がるため、階段に向かいながら私は真衣に訊いた。

「えっとなえっとな！22色入りのクレヨン！」

えへへ、と笑いながら真衣はそう返してきた。

「へ、へへ。でも真衣ちゃん本当にクレヨンでいいの？ それにクレヨンなら真衣ちゃん持つてるじゃない」

立ち止まって私は再度訊いた。

「あたしが持つてるクレヨン、みんな使っちゃってちっちゃいの！それに、由香ちゃんも愛ちゃんも16色入りの新しいクレヨン持つてるんだもん！私もみんなよりも沢山入った新しいクレヨンがほしいの！」

「そっか、なら寝る前に一生懸命お願いするんだよ？ 真衣ちゃんは今年もいい子だったから、きつとサンタさんも来てくれるからね」

「うん！！来年は色鉛筆がほしいから、一緒をお願いするね！」

「ら、来年ね。き、きつとサンタさんなら叶えてくれるよ」

真衣の驚きの発言に少し驚きながら、私は真衣の頭を優しく撫でて、二階の自室へ向かった。

最後に触ったのは朝の7時30分。自室のドアノブはすっかり冷え切っており、まるで氷のような感触だった。

ドアを押し自室へ入ると、思わず体が震えあがる。部屋の中も随分と冷たく、部屋の明かりをつける前に、私はすぐにエアコンのリモコンを手に取りスイッチを入れた、勿論暖房の。

部屋の明かりをつけ、指定のスクールバッグをポンツと床に放り投

げ、制服も適当に脱ぎ散らかして、パジャマに着替えた。いつもの家スタイルである。

今日は学校の終業式があつたので、今日から冬休みである。制服も存分に脱ぎ散らかせられて、とても気持ちがいい。いつもなら親に色々言われちゃうが、今日は大丈夫だろう。

次に、ベッドへ身を投げ全体重をゆだねる。息を思いっきり吸い、冷たい空気が肺一杯に広がる。

少しリラックスしたところで、下校途中の霞ちゃんとの会話を思い出す。

『うん、信じてるよ。サンタさん』

私は、サンタさんの存在を信じてると言ったが、決して嘘ではない。だって、小さい頃私は本物のサンタさんを見たからである。

単純明快であり、簡潔で覆せないような理由。だが、この話を信じてくれる人は、世の中では小さな子供くらいだろう。

深夜にふと目が覚め、ベッドの横に吊るしてある、プレゼントを入れる大きな靴下の方を、何となくチラリと見た私。

そこで目に映ったのは、今まで話でしか聞いた事のない、まったく想像通りのサンタさんの姿だった。

サンタさんは私が見ている事に気付き、こちらに向こうとしたその瞬間、私はいつの間にか眠っていた。

それが、最初で最後のサンタさんとの初コンタクト。それ以来一度も見なかったし、小学六年生の頃にはプレゼントすら貰えなかった。ついでに、この時親に『サンタさんはいない』と言われ、人生最大の大喧嘩した。ちなみにこの記録は今でも塗り変わっていない。

確立的、現実的に夢の可能性が大きい。もし本当に見たとしても、それはサンタの格好をした親かもしれない。少々こり過ぎだが、その可能性もある。

だけど私ははつきりと覚えているし、ずっと信じている。サンタさんの存在を。

そんな思い出を懐かしんでいると、さっき話した真衣との会話を思い出した。

『22色入りのクレヨンが欲しい!』

「クレヨン・・・か、そこで来年は色鉛筆ときたか。まさか来年のプレゼントも決定済みとは、我が妹ながら欲があるのか無いのか」

そう独りごちて、寝ぞうを変える。耳を澄ますと、下から元気な真衣の声が聞こえてくる。

「クレヨンも色鉛筆も、私が買ってあげたのにな」

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

時刻は0時を過ぎ、私にも睡魔が襲ってきた。家族はすでにみんな眠っており、耳を澄ましても下からは、数時間前までよく聞こえていた元気な妹の声も聞こえてこない。

「いい加減寝よつと」

ベッドへ横になり、厚手の毛布と掛け布団を被る。

「あ、そうだ。サンタさんをお願いしなきゃ」

慌てて思い出し、毛布と掛け布団を押し分け、上半身を起こした。今日出来たお願いを、サンタさんへお願いするために。

実に五年ぶり、12月24日の、懐かしい寝る前のお願いである。

「サンタさん、どうか妹が来年欲しがっている色鉛筆を下さい」

手を合わせ、合唱のポーズで十秒ほどお願いをした。

「よし、と」

毛布と掛け布団を再度被り、私は数分もしないうちに眠りについていた。

）
）
）
）
）
）
）

ブブブブと、謎のバイブ音が聞こえる。

重い瞼を必死にこじ開け、音が聞こえる方へ顔を向ける。

「んー・・・」

謎の音の正体は、やはり私の携帯だった。

「あ・・・そだ・・・今日から休みだった・・・」

今日は平日、いつもなら学校へ行くために起きる時間だ。しかし、今日は冬休みである。

どうやら昨日、携帯のアラーム機能を切るのを忘れていたようだ。

温かい布団から手を出し、ブルブルと震えている冷たい携帯を手に取り、手探りでボタンを押すと、携帯の震えは止まった。

「ううゝさぶさぶ」

思わず携帯を持ったまま、すぐに手を布団へ引つ込めた。

「携帯も寒かったのかな？ なんちて」

しかし誰も笑わないし、ツツコまない。そりゃ誰もいないからね。

それが余計寒かった。

しかし、寒いギャグのせいか、すっかり目が冴えてしまった。携帯のアラームで起きたのだから、おそらく時刻は6時30分つて所だろう。

そしてここで、ある感触に気付いた。

先ほどから頭の上、厳密に言うと頭頂部に何かあたっている感触がある。

「んーん・・・・・・・・・・えい!!」

一気に勢いをつけて、体をバツと起こし振り返って枕元を見た。

「あ・・・」

くくくくくくくくくくくく

スースーと可愛い寝息を立てながら、真衣は幸せそうによく眠っていた。

ちらりと、ベッドの横に掛けてある大きな靴下に目をやると、22色入りクレヨン、と書いてある四角い缶ケースが靴下に入っていた。

私は手に持った、色とりどりの鉛筆が入った、クレヨンの缶ケースより一回り大きい、四角い缶ケースを、真衣の枕元にそっと置いた。

「ありがとうサンタさん」

「でも」

私は軽く笑みをこぼし、懐かしみながら言った。

「色鉛筆くらい私を買ったなのに、さ」

そつ独りごちて、私は妹の部屋を後にした。

真衣の歡喜に満ちた声が家に鳴り響いたのは、数時間後の話である。

【二話】『憑乃宮少女と転校生』

「かに座のあなた、今日はハッピーデー！！朝から良いことだらけの1日かも！」

毎朝見ている占いのコーナーから発表された、私の今日の運勢をふと思いだした。

「よし！今日はいいことあるかも。いや、絶対あるよ！新年早々うれしいなあ」

肌に突き刺さるような寒さも、今日は気にならず、白い息もいつもより多めに出しながら、私は学校へと向かって走り出した。

校舎に着き、つつい鼻歌を歌いながら私は自分の教室2 - 8へと向かった。

「おーいみんな、正月少女が登校してきたぜ」

クラスの扉を開け、中に入るやいなや、いきなり私に向かって、男子から聞き覚えがある単語が放たれた。

その瞬間、クラスみんながドツと笑いだしはじめ。特に霞ちゃんは、自分の机をバンバン叩きながら大爆笑していた。

まったく訳が分からなかったが、馬鹿にされていることだけはハッキリと理解できた。

そそくさと自分の席に向かって歩き、席に着き、私は自分の机に突

つ伏した。

「学校に到着早々寝ちゃうの？　まだ正月気分かなー正月少女さん？」

霞ちゃんは、指でツンツンと私の体をつついてきた。

「うう・・・人身売買、売国奴。あなたが黒幕なんですよ・・・」

私はなるべく恨みのこもった声で言った。

「さーてね。ただ前田のやつに、面白い話はないか？　って聞かれたから、あんたが来たらある事言えば面白いよ、って教えたただけだよん」

なーにが、よん、だ。しかも、よりによってクラス一ひょうきん者の前田君に教えちゃうなんて・・・

ああーこれから当分いじられる・・・

前田君はクラスのムードメーカーで、よくみんなを盛り上げたり、面白い事を言ってくれるのだが、どうも私はあの人のテンションにはついていけず、一緒にいると疲れてしまう。悪い子じゃないとは思う・・・少なくとも隣の霞ちゃんよりは！

「はあー朝からついてなあ・・・占いて所詮は占いな？　ってあれ？　隣の席が空っぽになってる」

隣の席を見ると、いつもは机の横にかけられている、体操着袋や、鞆も何もかかっておらず、椅子もぴっちりしまったままだった。

「あゝ、なんか朝黒板に張り紙が貼ってあってさ、あんたの隣の席の前田、席移動しちゃったんだわ」

私の席の位置はクラスが一番後ろで、右側の隅っこにある。右隣は霞ちゃん、そして左隣は前田君。

この事から分かるように、私はいつも両隣からつねにいじられている。

「へ、へ」

なるべく平然を装い、私は言ったが。私の中では今天使さんが降臨していた。やっぱり占いは当たるのね！

左隣の前田君がいなくなった！まだ霞ちゃんが残っているが、ついに霞・前田連合軍からの戦いに勝利したのだ！これでようやく私にも、平穏な日常が帰って来たのだ！頑張った私！（私の力じゃなかったけど）

そんな、勝利の余韻に浸っていた時。教室の前の扉が開き、誰かが入ってきた。

「おはようみんな、ハッピーニューイヤー」

右手を高らかに上げ教室に入ってきたのは、このクラスの担任の峯城先生だった。みね
しろ

「新年早々みんなにだなー、一つ重大な発表があるんだー」

いきなりの発言に、クラスがどよめき返り、みんな頭にはてなマークを

浮かべ、先生の次の言葉を待った。

「えっとだなー、実は今日このクラスに一人、新しい仲間が増える事になりました」

何と重大な発表とは、転校生の事だった。まさかこの時季に転校してくるとは驚きである。

「うっそ、転校生？」

隣の霞ちゃんが驚きの声をあげ、私も動揺を隠せなかった。

「転校生だなんて、わ、私、はじ、はじめてだよ」

「何であんたが一番動揺してんのよっ」

ぼすつと鈍い音を立てて、霞ちゃんのチョップが私の頭に炸裂し、先ほどからいた天使さんが、私の手をつかんで飛び立とうとしている。

「まーそんな訳で、すでに廊下に来ているから、みんな静かにしてるんだぞ。それじゃ入ってこーい」

先生の声ではつと我に返り、天使さん達の手を振りほどき、扉を見た。

ゆっくりと落ちつた速度で、教室の前の扉が少しづつ開き、一人の女性が静々と入ってきた。

教壇までゆっくりと歩き、先生の横に立ち、笑顔をこちらに向けな

がら一礼した。

「ん？ どうしたお前ら。随分と静かじゃないか、なんだなんだ、がらにもなくお前ら緊張してるのか？」

そ、そりゃ緊張するよ、だってさ……。

「それじゃ、静かなうちに紹介するぞ」

先生はチョークを手に取り、後ろを向き黒板に彼女の名前を書きだした。

その間にも、彼女はこちらをにこやかに見続けている。

クスラのみんなは、私と同様金縛りにあっており、いまだに誰一人口も体も動かさない。いや、動かせない。

それは何故か、これは至極簡単な答えだ。

だって彼女が。

あまりにも美人さんだからだ。

170以上ありそうな細身の長身で、腰まで伸びている、綺麗で艶やかな黒髪にまず見とれてしまう。顔立ちも大和撫子を彷彿させ、真っ白く透き通った肌が眩しいくらいだ。

人生の中で、ここまで綺麗な人に会ったのは生まれて初めてだ。おそらくみんなもそうそうないだろう。

え、こ、これが本当に高校生なの・・・？それに比べて私っていったい何なの・・・？

そんな自己嫌悪までし始めた時、先生が黒板に名前を書き終えた。

門美音子。

「大阪から引越してきました、門美音子かんめき みねこって言います。これからよろしくお願いします」

ここで初めて彼女の声が教室に響き渡り、みんなの金縛りが一斉に解けた。

「それじゃ門、お前の席はあそこの空いてるとこだ」

「はい」

空いてる席？・・・って私の隣じゃん！！あああ！どうしよう！来てる！門さんがこっち来てる！

私が勝手に大混乱しているうちに、すでに隣に門さんが椅子に座ろうとしていた。

と、とりあえず挨拶しなきゃ！！

「はは初めましててー！」

今までにないきよどりっぷりに、私自身もビックリした。

そんなギリギリ言葉の挨拶を聞いた門さんも、優しい笑みを浮かべ

ながらこちらを向き。

「こちらこそよろしくね、えっとお」

「あ、う、つ、つ憑乃宮、つぎのみやあ、あゆ歩っていい言いましゅ！」

うわー！やばいー！ろれつが回らない！

そんな私の哀れな姿を見かねた先生が、助け船を出してくれた。

「憑乃宮ーお前が囁んでも可愛くないぞー。とにかく、みんな仲良くしろよ！それじゃ朝のHホームルーム！終わり」

そう言つて、先生は教室から出て行ってしまった。

そしてしばらく無音が続き……

ドアアアワワワ！！

言葉にできないような、みんなの歓声や驚嘆の音が響き渡り。みんな一斉に、門さんの席へ物凄い勢いで群がってきた。

それはまるでバーゲンセールのようなあり様で、唯一私と霞ちゃんだけがポツンと自分の席に着いたままだった。

「ねーねー！！門さんて本当に高校生なのー！」

「キャー！肌超きれー！」

「おい！ー！めっちゃいい匂いがするぞ！」

「体つきすげー!!」

そんな驚嘆の声が幾分もクラスに響き渡る。

何人か変態がいるが。

「す、すごい光景だね霞ちゃん」

私は霞ちゃんに同意を求めようとしたが、なぜか返事がない。

「ねえ霞ちゃん、ってあれ？ いなくなってる」

先ほどまで隣に座っていたのに、いつの間にか消えていた。

ふと門さんの方を見してみると、霞ちゃんはそこにいた。そして飛びまわっていた。

「すっげー胸!! あやかりてー! 隣の歩を見るよ! ははは!」

どうやら先ほどから聞こえてた、変態の声の主は霞ちゃんだった。

「霞ちゃんんんんんん」

結局私だけ取り残されちゃったな……てゆうか霞ちゃん酷過ぎるう……

「はあ……これ以上ここにいたら、あと何言われるかわかんないし……仕方ないトイレ行ってこよ……」

席を立とうとした時、みんなの体の隙間から門さんの目が見えた。目が完全に戸惑っていて、私に救いの手を求めていた。

助けてあげたいけど、私の言葉なんかじゃこの勢いを止めるのは不可能だなあ・・・

私は手のひらを合わせ。

「ごめんなさいっ！」

そう言っで、走ってトイレへと向かった。

）　）　）　）　）　）　）　）

用を足し、洗面台で手を洗い、ポケットからハンカチを取り出したその時。

「あっ！」

間違っで、ハンカチを水を出しっぱにしたままの洗面台へ落してしまった。

「あゝあ、ビショビショだ・・・ついてないな・・・やっぱり占いハズレてるのかなあ・・・」

結局手を拭く事は叶わず、ハンカチを絞り、手に持ったまま教室へと戻った。

いい加減ほとぼりも冷めたらうと思ったが、教室へと戻ると、みんなはまだ門さんを取り囲んだままでいた。

だがここで授業のチャイムが鳴り、国語の先生が教室に入ってきた。みんなは惜しみながらも、各々の席へと戻っていった。

私も急いで自分の席へと戻り、机の脇に着いているフックに濡れたハンカチをかけた。

「きりーっ、きょうつけ、礼ー」

日直が号令で授業の始まりを告げた。

あ、そうだ。

さっき悪い事しちゃった門さんに、何かお詫びしなきゃ。

「ね、ねえ門さん」

まだ少し口調が落ち着かないが、ゆつくりと慎重に話、先ほどよりはマシになった。

「は、はい？」

みんなからのバーゲン攻撃を受けたせいで、門さんの言葉からひしひしと疲れを感じた。

「えっと、何か困ってないかな？ あ、門さん教科書まだ持っていないでしょ？ だったら私と一緒に見ない？」

我ながらうまい事言った！

「あ、そうでした。では、お言葉に甘えさせていただきますね」

そう言っつて、門さんは笑みを浮かべてくれた。

ふゝ、どうやら少しはさっきの汚名を挽回できたかな？

「あ、それと私一つ謝らなければ。先ほどはどうもすみませんでした」

「え？」

今の会話を見ると、一見して私が謝っているように見えるが、なぜか門さんが私に謝った。

え、何で門さんが私に謝ったの？

そう言おうとした瞬間。

「先生すみません、教科書忘れましたー」

隣から霞ちゃんの声が聞こえ、出かった言葉が引っ込んだ。

「あ、私もですー」

「うげ、俺もだ」

「え、私も！？ 昨日ちゃんと確認したのにー！」

なんと、次々に何人もの人がドミノ倒しのように『教科書を忘れて

しまった』と先生に言い。終いには、門さんをぬいて私以外全員が忘れていた。

え？嘘何これ？ 私以外みんな忘れちゃったの？

言うまでもなく先生は激昂し、忘れた人みんなを連れて、職員室にまで行ってしまった。

またもや残された私と、隣の門さん。

「ははは・・・こーゆー事ってあるもんなんだね」

「ふふ、そうね。あなたが優しくしてくれてよかったわ」

「え？」

「気にしないで、こっちの話です」

そう言つて笑顔ではぐらかせられてしまった。私としても、あまり言及したくないので、これ以上訊かない事にした。

）
）
）
）
）
）
）
）

結局丸々一時間使ったお説教は、みんなの体力をかなり奪ったらしく、教室に戻るやいなや、朝の私みたいに、みんな机に突っ伏してしまった。おかげで休み時間になっても、誰一人門さんの周りに来なかった。

しかも、先ほどセクハラ発言していた霞ちゃんは特に運が悪く。何故か霞ちゃんだけ職員室で反省文を書かされているそうだ。

「霞ちゃんもついてないな」

「あの方が一番酷かったですからねえ」

しかめっ面で門さんが言った。

「あー、朝の門さんの件ね。確かにあれは酷かったな、朝の報いかもね、こりゃ」

「ふふふ、なら悪い事しちゃいましたね」

「あはは」

まだ会って一時間程しかたっていないが、先ほどの授業が潰れた時間のうちに、門さんと色々話が出来、いつの間にか結構仲が良くなっていた。

またみんなが大騒ぎするんじゃないかと心配したが、みんなが机に突っ伏しているおかげで、私と門さんは誰からも妨害を受けずにすみ、メールアドレスまで交換してしまった。

そんな時、ガラガラと教室の前の扉が開き、随分と疲れた様子の霞ちゃんが戻ってきた。

そのまま、よろよろと危ない足取りで、何とか席に着いた。

「お、お疲れ様。霞ちゃん……大丈夫……？」

「くっそお……何で私がクラスのみんなを代弁して反省文書かな

きやいけないのさ・・・理不尽&不可解×怒り」

そう言い終えた瞬間、がくつと机にうなだれてしまった。

「だ、大丈夫ですか？霞さん」

今度は門さんが、おずおずと訊いた。

「だーかーらー、大丈夫じゃな・い・・・・・・・・・・はっ！」

何かを思いだしたのか、ガタツといきなり席を立ち、門さんを凝視し始めた。

「え？ え？」

あまりにももの急な行動、そして門さんを凝視するその目。今度は門さんが金縛りにあってしまった。

「抱かせるー！ー！！！」

突然霞ちゃんが雄たけびをあげ、私の後ろを走り抜け、そのまま門さんに思いつきり抱きついた。

「え、ちょ、何やってんの霞ちゃん！？」

「ええ匂いじやのーええ匂いじやのー！」

いきなりの一方的な抱擁で、門さんは叫ぶ事も出来ず、頬ずりまでされていたが、されるがままだった。

その時、教室の前の扉が開き、2時間目担当の数学の先生が入ってきた。

「あ、やば」

数学の先生の登場に我に返った霞ちゃんだったが、時すでに遅し。

数学の先生は激昂し、霞ちゃんを連れてまたもや職員室へと行ってしまった。

連れて行かれる霞ちゃんの後ろ姿に、私は戦場へ行く、夫を見送る妻のように、濡れたハンカチを振りながら見送った。

「あ、え？ どうしたの？」

何とか霞ちゃんの呪縛から解放された門さんが、キョトンとした顔で私に訊いてきた。

「えっと、私たちの担当の数学の先生って、この学校一の厳しい先生でね。先生が教室に入って来た時に、ちよつと立っていただけで怒っちゃうの。教科書とか忘れたら・・・考えたくもないよ・・・」

どうやら、一時間目のお説教のおかげで、みんな疲労困憊し立つに立てず、座っていたから難を逃れたようだが。霞ちゃんは運悪く、一人暴走したせいで、自分だけ立っている形になってしまったのだ。

霞ちゃん、今日は本当についてないなあ。南無阿弥陀仏、と。

「まー霞ちゃんについてないけどさ、私たちはついてるかもよ？」

「え？」

門さんが不思議そうに訊き返す。

「これじゃあ、二時間目の授業が潰れたも同然。特に数学はあの先生だからさ」

すっかり霞ちゃんの事は忘れ、自然と笑みがこぼれてしまった。

「ふふふ、そうかもしれませんね」

門さんも笑って返す。

「あ、なら」

門さんは何かを思いついたように、ぱんっと手をたたき。

「ん？」

「またお話の続きをしませんか？　どうやらみんなまだ元気がないようですし」

「あ、そうだね。それじゃあ……」

「どうやら。」

朝の占いは当たっていたようです。

【二話】『憑乃宮少女と転校生』（後書き）

このお話はあと一回か二回続くと思います。

【三話】『憑乃宮少女と座敷童子』

ざしきわらし
座敷童子。

主に東北地方に分布していて、私は妖怪の類かと思っていたがた、
どうやら精霊的な存在らしい。

主な特徴は、座敷童子を見た者には幸福が訪れたり、家に富をもたらすとも言われている。

一般的には、赤面垂髪の5、6歳くらいの小童というが、年恰好は
住み着く家ごとに異なるともいい、下は3歳程度、上は15歳程度
の例もある。髪はおかつぱ、またはざんぎり頭。赤いちゃんちゃん
こや小袖、ときには振袖を着ているという。

しかし、私が出会った座敷童子は、私が思っていた座敷童子とはま
たくもって違う存在だった。

「ねえ、お昼ご飯は屋上にでも行って食べない？」

「うー、私はパスするわ。私は昼休み机にかじりついてなきゃいけ
ないからさ……」

3時限目から極度の疲労感が霞ちゃんの席からヒシヒシと伝わり、4時限目が終了し待望のお昼に突入したので、気分転換に屋上で昼食をとろうと誘おうとしたのだが、どうやら逆効果だったらしく、霞ちゃんはさらに元気がなくなってしまった。

「私には気をつかわないで行ってきなさいよ。どうやら以外にもあったが一番門さんと仲良さそうだしさ。屋上でさらに親睦を深めて来なさい・・・・・・」

弱弱しい笑みを浮かべながら、霞ちゃん是我们を屋上へと促した。

霞ちゃんも同情されるのが嫌いだからなあ……

しょうがないか。このまま隣にいて楽しくおしゃべりなんか出来ないし、お言葉に甘えて行くでしょう。

「わかったよ。ありがとうね霞ちゃん。それじゃ門さん、行こっか」

「あ、はい分かりました。霞さんありがとうございます、頑張ってくださいね」

反省文と書かれた紙が、何枚も散乱した机に突っ伏している霞ちゃんに、私と問さんはお礼を言い、教室を後にした。

§
§
§
§
§
§
§
§
§
§
§
§
§

昼休みも半分終わり、お昼ご飯もお互い食べ終わった。

5 時限目を告げる余令が鳴るまで、私たちは屋上で話している事にした。

「あのー、憑乃宮さん」

「ん、なーに？」

「いきなりですみませんが、ちょっと答えにくい事を御訊きたいんですが、いいでしょうか？」

「え、何々？」

門さんがいきなり堅苦しい面持ちで、私に質問の両諾を得る質問して来た事に対し、私は半笑いで軽く返した。

「大丈夫だよ！私、スリーサイズとか訊かれても簡単に答えちゃうよ！あっはっは」

シーーン。

冗談のつもりで言ったのだが、門さんは依然として重々しい表情のままだった。

お、面白くなかったのかな……。あ！それとも本当にスリーサイズだったり！？ え、うそ……。どうしょ……。あんまり言いたくないなあ、とゆうより言えない……。。

それもそのはず、相手は門さんなんです！？

真っ白で透き通るような肌に、綺麗なストレートの髪の毛。出るとこはちゃんと出ていて、それでいて細身で長身だ。比べて私は、あまりにも平凡な体つき。食べた分ちゃんと太る体質で、身長も中

途半端な高さである。はつきり言ってまったく目立たない。そして肝心の胸囲は、親友の霞ちゃんにさえ・

『ロードローラで平らにしても、ここまではならない』

とまで絶賛された折り紙つきだ。出る涙も枯れてしまった。

「よかった……。あまり深く考えずお答えになって下さいね」

「は、はい」

以前測ったスリーサイズの悪夢が脳裏をよぎり、思わず声が少し甲高くなってしまった。

そして、ゆつくりと冴さんの口が開いた。

「憑乃宮さんは座敷童子に対して、どうゆう見解を持っていますか？」

へ？ なぜにいきなり座敷童子？ 今日を振り返っても、冴さんと座敷童子に触れた会話などした覚えはない。

「え、えつとお？」

「すみません、いきなりじゃ戸惑いますよね。なら、座敷童子に、いや、そのような類の存在を信じていますか？」

「ん、んー」

どうしよう、何て答えようか。問さんの顔はさらにも増して真剣な顔つきで、冗談やギャグを言ってるようにも見えない。例えこれがギャグでも、私には高度過ぎて笑えないだろう。

つまりこれは、本気で私に質問しているのだろうか？

それとも、何かしらの心理テストや占いの類なのだろうか？

一体何て答えようか……必死に返しの言葉を頭の中で紡いでいた、その時。

キンコーン、カーンコーン。

5時限目の始めを告げようとする余令が、校舎に力強く鳴り響いた。

「あ……そろそろ戻らないと授業に遅れちゃいますね。お答えは放課後にでもいいので、その時間かせて下さい。では、お先に失礼します」

早口でそう言い終わると、ペコリとお辞儀して問さんは屋上の鉄製の扉を開け、そそくさと一人で行ってしまった。

扉がバタンツと大きな音を立てて閉まり、その瞬間私ははっと我に返った。

「あ、私も戻らなきゃ」

今考えていた事が完全に消し飛んでしまい、とりあえず最優先事項の教室へ戻るとゆう答えが頭に浮かび行動した。

小走りで扉に近寄り、若干静電気を帯びたスチール製のドアノブを手に取り、重々しい扉を開け校舎の中に入った。

階段上の踊り場に、扉が閉まる大きな音と門さんの足音が木霊する音を聞きながら、私は階段を下って行つた。

§
§
§
§
§
§
§
§
§
§
§

放課後。

時刻は16時30分を回り、気付いたころには、クラスには私と門さんしか残っていなかった。

あれ？ おかしいな．．．いつもはみんなすぐ帰らない筈なのに．．．。

いや、それ以前に私と門さん以外残っていない！？

いつもなら少なからず、男子も女子も、特に理由がなくても残っているものだ。なのに今日に限って誰もいない。さっきまでいたはずの霞ちゃんもいなくなっている。

霞ちゃんどこ行っちゃったんだろ・・・鞆はあるから帰ったわけではなさそうだけど、職員室とかかな？

そして隣の門さんは、未だに屋上の時と同じ雰囲気が漂わせていた。昼休み以来、授業中や休み時間もどうも上手く話しかけられず、あちらも話しかけてこないのです。まだ一言も会話していない。

う。ただでさえ気まずいのに、さらに二人つきりだなんて……

。

「憑乃宮さん」

心臓と体が飛びあがる。門さんの一言一挙に、無意識に体が反応してしまい、嫌な汗が流れる。何で私はこんなにも門さんに怯えているの？

私はなるべく平然を装いながら、ゆつくりと答えた。

「な、なに？」

「そろそろ、お答えを御聞きしていいですか？」

こ、ここはなるべく、正直に答えた方がいいと思うから、私の思った通り正直に言おう。

「んー・・・・・・・・私はそうゆう非現実的オカルトなものは、あんまり信じてないかなあ・・・・・・・・あ、でも！座敷童子とかサントさんとか、私はこの世界にいてもいいと思うし！素敵だなーって思う。いるなら会ってみたいとも思ってるよ？」

思いのすべての事を言い、教室に沈黙が流れる。

恐る恐る門さんの方を見る。そこには今まで見た事のない、笑みのような戸惑いのような、そんな微妙な顔をしていた門さんがいた。

そしておもむろに私に一步近づき。

「なら。もし憑乃宮さんの前に座敷童子が現れても、憑乃宮さんは

嫌がったり怖がったりしないんですか!？」

また一步私に詰め寄りながら、かなり興奮気味に私に訊いてきた。

「う．．．うん。多分大丈夫だよ．．．?」

門さんの気迫にうるたえつつ、私は大丈夫と言った。

この答えは、別にこの場しのぎの嘘でもないし、虚勢でもない。おそらく私は本当にソレらに会ったとしても、大丈夫だと思う。この場合の大丈夫は、怯えたり、存在をあくまで否定したりはしない。とゆう意味である。会えるなら、会ってみたいと思うのも事実だ。

「それはよかった．．．。本当によかったです。私は安心してこれからも憑乃宮さんと友達でいられます．．．。」

そう言つて、門さんはぺたんと自分の席に座り込んだ。

「ん?ん?」

言っている意味が分からない。まるで自分がその、非現実的オカルトな存在であるかのような口ぶりである。

門さんは見た所は、かなりスタイルのいい美人女子高校生と言ったところだ。食べる物もごく普通の物だし、今日一日見ててもおかしな点はなかつ．．．．た．．．よね?

ここで、私の頭で何か引っかかる点に気付いた。

それは言うまでもなく、いきなり訊かれた謎の質問。そして私が非^{カルト}現実的な事は大丈夫と言った時の、大いに喜んでいた門さんの過剰のような反応。

そして、最初に何故か限定的に訊いてきた。

座敷童子。

待てよ待てよ……確か座敷童子って子供の体格だったよね？

そんで女の子で、ぱつっんの髪型に、昭和に出てくるような古い格好。そして座敷童子を見たものには幸福が訪れる。

いくらオカルトに疎い私でも、ここまでは一般的に知りうる情報だ。付け足すなら、東北のどっかの県の宿によく出るって聞いた事がある。

まさか門さんがその座敷童子？ いやいやいや、まさかまさか。特に理屈はないが、ありえない。だって私の知っている座敷童子とは、女の子の部分しかあっていない。

仮に門さんが座敷童子としたら、この謎の質問や、過剰な反応も筋が通るが、でもあり得ない事である。私はこの二つの目で見た物以外、信じないのだ（今考えた設定）

きっと門さんは、そういったオカルトに、そう特に座敷童子に興味がある、ちよつと意外な一面を持っていた女子高校生なんだ！ きっと

とそう！だから私になんかの拍子で素性がばれて、嫌われたりしないかが気になっていたんだね！門さん！？

そんな素敵な答えを導き出して、キラキラと目を輝かせながら私は門さんを見つめた。

そんな私の熱い視線を感じて、門さんも私の意思を理解してくれたのか、清々しい笑顔で私に言い放った。

「私、その座敷童子なんです！！」

私の儚い想いは、完膚なきまで粉々に打ち砕かれていた。

【四話】『憑乃宮少女と欠落少女』

幸せ、と一口に言ってもそれは星の数ほどある。

ただ、私が何個かに絞るとするなら、まず最初に思いつくのが財力の幸せだ。

財力はこの世のほとんどの人々が挙げる、幸福の一番の具体例だ。お金というのは沢山あってもまったく困らない、むしろより一層生活が楽になり人生にも華が付く。お金がある分だけ、好きな物をなんでも買い、好きな食べ物をいつでも食べ、好きな場所に家も建てられる。まさにお金とは、一番の幸福の象徴とも言えるだろう。

次に挙がるのは運のある人生である。

人生いくらお金があっても、どうしようもなく運が無く、いつもトラブルに巻き込まれるなら、それは幸せとは言えないだろう。毎朝電車に遅れる、学校に遅刻する、事故に会う、持病が見つかり、最悪命をおとす。そんな人生は誰も願っていないし、誰も望まない、つまり運がある人生とは、どんな大金にも匹敵する幸福なのだ。

私にとって幸せとはこのように定義している。それなら。

今の状況は、私にとって理想の幸せ、とゆうことになる。

）
）
）
）
）
）
）

「おかえりなさい、歩ちゃん」

「おかえり、歩」

「歩お姉ちゃん、おかえりなさい！」

玄関の扉を開け、すぐさま家族全員の帰宅挨拶が聞えた。

「え・・・？」

私の目の前には、屈託のない笑顔の妹の真衣に、狂喜乱舞している母親、天真爛漫な笑顔の父親がそこにいた。

家族みんなで私の帰りを待っていた？ それも玄関先で？ 何でみんなそんな笑顔なの？ てかお父さん仕事は？

意味のわからない状況で、頭が脳が完全についていけない。それもそのはずだ、今さっき学校でとんでもない告白を受けてきたばかりなのに。頭がの中ぐちゃぐちゃで整理できていないのに。

「聞いて驚かないでね歩ちゃん・・・なんと・・・」

お母さんは少し間を開け。

「宝くじが当たりましたー！！ぱふぱふ」

そう言つて、お母さんは宝くじをポケットから大事そうに取り出し、手に持ちながらくるくる回り始めた。

「え、え？ 宝くじ？ 当たつたの？」

「そうよ歩ちゃん！ なんと30万よ！さんじゅーまん！」

「さ、30万！？」

うそ！本当に！？ 心配性のお母さんの事だ、番号を何度も確認しているはず。見間違いなんて事は確実にないだろう。つまり、本当に当たつた！？

宝くじが当たつたと聞いて、当選金額が30万とは微妙な額だ。と他の人は思つかもしれないが、そんなことは決してない。1万円でも素直に喜べる家の家族にとって、30万とはもはや神の位くらいである。

とゆうことは、お父さんと真衣が喜んでいる理由もそれなのか？

「歩。宝くじの事だけで、私たちが喜んでいるとは思っていないか？」

私の心を読んだのか、お父さんがすかさず私の疑問の打ち消した。

「実は今日な、会社の方で大事な取引先と商談したんだが、どうも話が滞ってしまつてな、非常に困っていたんだ。そんな時、私がふと漏らした一言が、話に大きく影響してな、商談が一気に進んだんだよそして結果的に会社に大きな利益が出来たんだよ！はっはっは」

大笑いをしながら、お母さんの手を取り一緒にくるくる回り出した。

「歩お姉ちゃん！今日ね今日ね、ガラガラで絵具セットが当たったの！」

今度は真衣が口を開き、喜んでいる理由を述べ、そのままお母さんとお父さんの手を取り、くるくると回り出した。

そして補足するようにお母さんが答える。

「今日子供町内会の福引でね、絵具セットが当たったのよ。真衣ちゃんも丁度コレが欲しい景品だったから、もう大喜びしちゃって。本当に今日は最高の日よ」

「・・・・・・・・」

あまりにももの驚きで。口が開きっぱなしになり、何も言えなかった。

私を抜いて、同じ日に家族全員に幸せが訪れた。それは紛れもない事実で、真実だが。

私が驚いているのはソコではない。

私が一番驚いているのは。放課後のあの時の言葉。

門さんの言った言葉が、本当に現実だったから。

）
）
）
）
）
）
）

「ざ、座敷童子？」

「うん。私、あの座敷童子の子孫なんだよ」

そう控え目な笑顔で門さんは言った。

いきなりの現実味のない告白に戸惑いつつも、とりあえず門さんが座敷童子かどうかは保留し、色々と気になる事を訊いてみる事にした。もしかしたら、もしかすると、門さん・・・電波さんかもしれないから・・・。

「なら、門さんを見た人はみんな幸せになったりしたり？」

「・・・ううん・・・その辺はちょっと複雑なんだ・・・」

ずっと笑みが消え。昔の事を思い出したのか、暗い顔で門さんは答える。

「私のお母さんはね、座敷童子だったの」

ゆつくりと、少しずつ昔の事を喋り出す。

「でもお母さんは、私が7歳の時死んじゃった・・・」

「ここに引っ越す前は、お父さんの実家の家に暮らしてたわ。そこから学校に通ってたの、だけど今は違うわ。今は学校の近所のアパートで一人暮らししてるの」

「え、一人暮らし？」

またもや驚きの声があがる。

「うん。この学校に通うには実家は遠すぎるの。お父さんも一緒に来るって言ったけど、私は必死に説得して、一週間程前から一人で暮らしてるの」

「へ、へへ。けどどうして？ その・・・お父さんと折り合い悪いとか・・・？」

あまり人の家庭事情を訊くのはよくないと思うが、無性にも謎に満ちた門さんの存在、座敷童子の存在が、私の言葉の配慮をなくす。

「いいえ。お父さんは優しいし、私やお母さんが座敷童子だからって嫌いにならなかったし、本当に最高のお父さんだと胸を張って言えるわ」

実家にいるお父さんを思い出したとか、思わず門さんの顔から優しい笑みがこぼれる。

「私ね、お母さんがまだ生きてた頃、色々と座敷童子の事を教えてもらったわ。座敷童子とはどんな存在なのか、座敷童子の力とか、小さかった私にはよく理解できてなかったけど、それでも一つだけ分かったわ」

間をあげ、門さんは言う。

「座敷童子とは、きっとお母さんのように優しくて暖かくて、誰もが愛する存在なんだって」

「誰もが愛する存在・・・か」

問さんの言葉を、私はオウムのように繰り返す。

「でも、私が大きくなってからそれが狂言だったって事に気付き始めるの・・・」

今までにない無機質な声が響く。

「え・・・？」

「あれは私が小学3年生の時だったわ」

問さんは語り出す。決して掘り出たくない、己の一番の不幸の記憶。

「休み時間、教室で自分の席で次の授業の準備をしていた時、私の横を一人の男子生徒が通った。だけど途中で男子生徒は、何故か私の隣で立ち止まった。どうやら私のポケットから一人で落ちたハンカチを、私の横を通った際踏んづけてしまったの」

だけど、と問さんは続け。

「男子生徒は悪そうに、踏んでしまったハンカチをポンポンと叩いて、『ごめんね』と謝って差し出したわ。その子には勿論悪気はなく、ちゃんと謝ってくれたから、普通はここで『気にしないで』で和解して終わるはずだった・・・」

思い出したくないのか、それともその時の自分に苛立っているのか。問さんはそんな顔を浮かべた。

「そのハンカチは、お母さんが死ぬ間際に買ってくれた大切な物。自分が落したのに、そんな事も忘れ、私はハンカチを受け取り『ありがとう』も言わず無言のまま俯いたわ。その子も急いでたのか、私の無反応を気にしつつも教室から出ていったわ」

門さんの表情はさらに暗くなる。

確かにそんな親の形見ともとれる物を、わざとじゃないにしろ踏まれたらむっとしてしまう。特に小さな子供ならなおさらだ。

「これがきつかけだったわ……。私は、初めて他人を心から憎んだ、恨んだ、そして悲しんだ」

「そんな時、その子かが教室から出て行き、数分後、女子生徒の甲高い悲鳴が聞こえたわ。何事かと廊下に出てみれば、階段に人だかりが出来てたの」

「あの子が階段から落ちて、倒れていたわ」

どくん！と心臓が飛びあがった。背中に冷たい水を流されたような、そんな感覚を感じ、冷や汗が流れ出す。

「本当にびっくりしたわ。だってつい先ほどまで、その子を憎んで恨んでいたのよ？ まるで自分のせいで、こうなったんではないかとゆう錯覚に陥ったわ」

門さんの顔を見ると、半笑いのような、自重のような、そんな顔だ

った。

今の話の流れ上、確かに門が原因で男子生徒が階段から落っこちたと推測できるが、そんな事はない。話を聞いている限り、門さんは直接何もしていないし、何も話してない。あくまで偶然とも見えるが・・・。

「憑乃宮さんの察しの通り、私は何もしていない。確かにその子と数分前もめたが、私は教室から一步で出ていない。だから小さかった私は、きっとこれは私の大切な物を踏んだ、あの子への天罰なんだと思っただわ」

「そ、その子をどうなっちゃったんです？」

恐る恐る訊き出す。

「階段から派手に落ちただけで、あんまり大きな怪我はなかったわよ。次の日から、ちゃんと学校に登校してきたわ」

「よかったぁ・・・」

安堵の息がこぼれる。そして、ふと無意識に私は思った。

門さんが人殺しにならないでよかった、と。

なぜこのような事を思ったのか、自分でもわからない。

「ただどね、それ以来私の周りにおかしな現象が起きたの」

「おかしな現象？」

少し含みを加え。

「他人を不幸にする現象よ」

ふと今日の出来事が頭によみがえる。クラスのみんな、霞ちゃんに起きた出来事。少しずつ、頭に散らばったピースがあてはまってい

く。
それって今日の霞ちゃんや、クラスのみんなに起きた事と関係してるの？ そう言いかけた時。

「これが私の、座敷童子のなりそこないの力よ」

なりそこない、欠落している力を持つ、欠如している座敷童子は言った。

「あの子の事件を境に、私がちよつと嫌なことされたり、負の感情を相手に想うと、その相手に不幸が訪れた。最初はたまにだったのに、年が重なるにつれ”たまに”が”確実”に変わっていったわ。自分がその以上に気付き始めた時」

「幼かった頃の私には理解できてなかった、お母さんの言葉をふと思ひ出したわ」

『あなたの力は不完全、だからあなたにとってその力は、他人を不幸にするかもしれない。けどあなたは、私と純じゅんさんとの、座敷童子と人間との子。だからあなたは人に幸せを届ける事が出来る、素晴らしい座敷童子になると信じてるわ』

「この時私は思い出したわ、ああ・・・私って座視童子だったんだな・・・と」

欠落した座敷童子は、酷くやつれた顔でつぶやく。

「あの事件が、私の欠落した力を目覚めさせた。だけど私はその力をコントロール出来ない、欠落しているから、だから私の感情が全てを握っている。私は、他人を寄せ付けないようにした、どんなに意識しようとも、無意識のうちに負の感情は生まれる。だったら他人を寄せ付けなきゃいい、そう考えた私は違う小学校に転校し、無口で根暗なキャラを演じ続けた」

一体その時の門さんは、どんな心境だったのだろうか。他の子と仲良くしたい、遊びたい、喋りたい。子供にとってそれは、どれほどの悲痛な状況だったのだろう。

「中学生に上がったところかしら、そんな私にもうれしい事が起きたの」

それは、と続け。

「相手に幸福を与える力が生まれた」

「不幸にする力とは逆に、私が感謝や、感激、などの負の感情とは逆の感情を相手に抱くと、その相手やその家族に幸福が訪れるようになった。本当にうれしかった・・・まだコントロールは出来なかったけど、本来の座敷童子としての力が現れて幸せだった」

その時の感激に浸っているのか、先ほどから消えていた笑みが小さ

く出てきた。

「でも、結局は意味のない事だった……。中学生ともなると、周りのみんなも段々と大人になりつつあって、洞察力や観察力も上がってきたせいか、私のおかしな力にゆつくりと気付き始めた。中学二年生の時には、私からじゃなくあつちから離れていったわ」

「そんな……」

わずかにきざした希望の光は儚く消え、さらなる絶望が訪れた。もし自分に、そんな現実が来たら耐え切れたろうか？

「私は決心したわ、私はこの力がある限り、他人とは関わらないとでも……。結局だめだったな……」

門さんは自嘲気味に笑った。

「高校生の頃には随分と私の力も変化していたわ。基本的な法則は変わっていないけど、私の感情に比例して相手に訪れる幸福と不幸の規模が大きくなった」

でもね、と続け。

「だからと言って高校生になっても、私は避けられた。こちらからではなく、あつちから。ついに耐え切れず、私は自分を変えるため、この町に一人で越してきた」

ここで門さんの思惑が少しだけ分かった。

そっか、だから自分の一番の理解者の父から離れるため、甘えない

ため、強くなるため、門さんは一人でこの町にきたのか。

「そこで、私は不思議な出会いをした。憑乃宮さん、あなたに」

「え？」

ふといきなり呼ばれた私の名前に、反射的に言葉出た。

「今日初めて教室であなたを見た時、変な感情が心の中で巻き起こったわ。あなたに全てを話したい、あなたならきつと理解してくれる。そんなまったく根拠のない想いが生まれた」

「わ、私を見て？」

「ええ、自分でもさっぱりわからない、まるで本能のような、私の中の”座敷童子”が訴えたの。ごめんなさい、そんな事のために、こんな話をしてしまつて・・・」

急展開に頭が起きてけぼりになり、なんと答えたらいいのか分からない。

「何で初対面の憑乃宮さんに、こんな非現実的オカルトな秘密を話したかったのか。せつかく自分を変えるためにここまで来たのに、一人暮らしまでしたのに、嫌われるかもしれないのに、私の秘密が知られれば、またみんなが遠ざかってくかもしれないのに・・・でも、これだけは今はつきりと言える」

「会えて本当によかった」

目の前の欠落した座敷童子、門美音子は笑った。

【五話】『憑乃宮少女と門少女』（前書き）

切るに切れず、非常に長い文章としますので、ゆっくりとお読みください。

このお話で、『座敷童子』編は完結しました。

【五話】『憑乃宮少女と門少女』

少なくとも私には、今も肌に感じる冷たい冷氣に意識を向ける暇などなかった。

家を出てからかれこれ数時間、私は商店街の入り口付近にポツンと存在する、寂れた公園にやって来ていた。

いつ来ても人影は乏しく、現に今も鳩に餌をあげている老人を視界で確認できる程度で、小さな公園も無駄に広く感じてしまう。

「はぁ……どうしよう……」

大きな公園に、私の小さなため息が落ちる。私は先ほどからずっとため息ばかり吐いており、もしたため息が目に見えるなら物なら、私の真下にはため息の残骸が山のように積もっているだろう。

家を飛び出した理由は簡単だ。満杯で収集がつかなくなった頭を、慎重に整理したいからだ。家の中は今、幸せの絶好調にいる家族が騒いでいるので、うるさくて自室でゆっくり考え事も出来ない。だから私は、この寒い寒い時間帯の外になお外に出て、こうしてベンチに座って頭の整理しているのだ。

皮肉にも家族が騒いでいる理由は、今必死に悩んでいる理由と関係しているとゆうのに。

座敷童子。

家を出る前、自室にあるノートパソコンを使い、大手検索サイトで調べてみたが、悩みを解消する事は叶わなかった。

ピュー。

強い風に乗り、一層冷たくなった冷風が私の体を横殴りする。

家を出てからすでに数時間経っている。首に巻きつけた赤いマフラーがヒラヒラと風に漂い、黒いダッフルコート of 防寒性が段々とな
くなってきた。

「カイロでも持ってくればよかったなあ」

一向に解決しない悩みに、時間が経つほど厳しさを増す寒さ。もはや正常な思考で物事を考える事など出来ないと判断した私は、ベンチから立ち上がり寂れた公園の出口を目指した。

$$\begin{array}{c} \textcircled{1} \\ \textcircled{2} \\ \textcircled{3} \\ \textcircled{4} \\ \textcircled{5} \\ \textcircled{6} \\ \textcircled{7} \\ \textcircled{8} \\ \textcircled{9} \end{array}$$

「はい、お釣りの二百円」

寒さなどへつちらと言わんばかりに、豪快に笑いながら、おじさんは私に肉まんのお釣りを渡した。

ここは商店街の顔馴染みのおじさんが経営しているお店で、私は暖かい肉まんを一つ買い食いしながら帰ることにした。

悩みの解決方法は結局一向に進展を見せなかったが、こうして温かい肉まんを頬張りながら歩いていると、その間だけ悩みから解放さ

れる気分になる。

赤いマフラーを揺らしながら、肉まんを頬張り、よく噛み、飲み込む、そして顔の筋肉が緩む。それを繰り返しながらゆっくりと歩き、商店街の中腹辺りに差し掛かったその時。ふと何気なしに、私は脇道にポツカリと空いた裏路地の入口を見た。

店と店の間に出来た、僅かなデッドスペース。日の沈みかけた空も手伝ってか、裏路地の奥は一層深まった暗闇で、あまり奥まで見れなかった。

だが、何が気になるのか、私はそのまま通り過ぎずにその裏路地の真っ暗な入口に近づいた。

自分でも何でそんなにこの裏路地が気になるのか分からない、けど体が自然に、至極当たり前のように、因果に吸い寄せられるように、私は裏路地に足を踏み入れた。

「ん・・・誰がいる？」

まだ一歩しか足を踏み入れてないのに、先程から見えていた漆黒の闇はなくなっており、奥が見やすくなっていた。（しかし、裏路地の本来の暗さは健在している）

そして、見通しが良くなった奥の細い通路に、一つの人影を確認できた。

性別は確認できない、顔立ちなども暗くてよく見えないが、体つきは身長が高くて線が細い、まるで今日出会った私の悩みの種の張本人のようだ。

服装は暗くてよく確認出来ないが、唯一目視出来たのは、首に掛けている白いマフラーだけで、まるで黒い闇からボウツと吹き出ているようだった。

手には何かの袋、おそらくビニール袋を手に持ち、佇んでいる。

何となく近づかないで、そのまま様子を見ていたら、不意に袋に入っていた何かを取り出し手に持った。左手の手のひらにその何かを置き、右手の人差し指をピンとつきだしながら、その何かに人差し指をツンツンと当てては下げ当てては下げ、と奇妙な行動をしていた。

私はここで謎の行動をしている謎の人物に興味が湧いてきたのか、もう一歩もう少しと近づいていく。

そして、三歩目でついにその謎の人物の顔を、私ははっきりと見る事が出来た。

その刹那、私は横に小さく空いていたデッドスペースのデッドスペースに体を押し込み、奇跡的に身を隠した。

風など当たらないはずなのに、赤いマフラーだけが隙間からヒラヒラと漂っていた。

$$\begin{array}{c} \textcircled{1} \\ \textcircled{2} \\ \textcircled{3} \\ \textcircled{4} \\ \textcircled{5} \\ \textcircled{6} \\ \textcircled{7} \\ \textcircled{8} \end{array}$$

何故だから分らない、どうして私はあそこであんなに綺麗に笑えたのだろうか。

どうして自分の正体を、自分からばらしたのか。何もかもが分からない。

ただどーっただけ分かる事があった。

それは、私にはもうあの学校ではやっていけない。

自分の正体、いや、自分の欠落した力のせいで、今まで通りの日常が襲ってくる。

蔑み、避けられ、嫌われ、そして・・・怖がられる。何よりもそれが一番辛かった。自分の正体不明な力に怯えた目で見られるのが、本当に痛くて辛くて苦しかった。

きつとあの少女は私の話を信じただろう、今日の学校の出来事、おそらくあの少女の家族にまで影響した私の欠落した力。

きつと不幸の方ではない、私のあの時の感情は、感激や感動、そんな感情で溢れていた。私の感情に比例して、訪れる幸福も不幸も力を増す。ならあの時の感情はかなり高かったはずだ、もう何十年も他人に向けた事のない、純粋な喜びの感情、即ち訪れた幸福もそれ相応のはずだ。

だったらあの少女は、逆に私に感謝するだろうか？

どうだろう、今回の件で私の力を利用しようを企めば、きつと明日も普通の対応をしてくれるだろう。だがしかし、あの少女はそんな悪知恵の働く、悪い人間ではないと思う。

少なくとも今日一日触れ合った感想としては、良い子、だ。

心は純粹そう、友達想いで、よく喋って、よく笑い、オドオドしているところを見ると、小動物を彷彿ほうふつとさせ、見ていて可愛いくらいだ。それに、私の現実離れした話に最後まで耳を傾けてくれた。

そんな子が、他人を利用して益を得ようとするとは到底思えない。

だったらやはり、明日から私を避けるだろうか？ あの少女はきっと無用にこの話を他言しないだろう、仮に誰かに私の秘密を話した所で信じる人などいないだろう。だが、それも時間の問題だ。私の力は些細な感情でさえ、その影響を及ぼす。きっと明日もクラスみんなは私に構ってくるだろう、そうになったら今日の二の舞え、一カ月も経たない内に私は孤立するだろう。

そう、どう転んでも私には明るい日常など望めない、叶えられない、どんなに願った所で私の欠落した力によって全て破壊される。

「私の力は、私自身をも不幸にする……」

そう独りごちて、現在の居場所に意識が戻る。

ここは商店街の裏路地。この町に引越してきて四日目に、私はこの裏路地を見つけた。ここを通ると自分が住むアパートとの距離が、格段にも縮む近道ルートなのだ。

左手には『白光火蜥蜴はっこうひとかげ』とプリントされているビニール袋を持っており、中には今さっき買った新しい子が入っている。サボテン

学校から自宅のアパートに帰り、暗く沈んだ気持ちを少しでも和らげようと、五日目に見つけた人気のない公園に行こうと思い、近道

のこの裏路地を通った。

しかし、何度もここは通っていたのに、どうして今まで気づかなかったのか裏路地の中に謎の花屋が建っていた。

そこでこの子^{サボテン}を買い、お店から裏路地に出た瞬間、何故かこんな所で考え事に耽っていた。

「あ、そういえばこの子^{サボテン}の事、よく見てなかったっけ」

お店の中の不思議な雰囲気^{サボテン}のせいで、ろくに見もせず^{サボテン}にこの子を買ってしまったのだった。

ガサガサツと袋から音を鳴らしながら、慎重に新しい子^{サボテン}を取り出し、右手の手のひらに乗せる。

「君、意外と軽いんだね。多分女の子かな？」

左手の人差し指を伸ばし、ツンツンと指を棘に当てる。

私のほんの数メートル先に、あの少女がいる事など知らずに。

風など吹いていないのに、首に掛けた白いマフラーの先端が空中にヒラヒラと漂う。

その時。

「つッ！」

漂うマフラーに目がいつてしまい、誤って指に棘が数ミリ刺さって

しまった。痛覚の反射で指を無意識に右手をこの子から遠ざける。サボテン

人差し指の先端から、赤い滴が少しず溢れてくる。右手を自分の顔の前までもってきて、傷の具合を見る。

そしてそこで気付く。

そこで気付いた。

無意識のうちに感情を抱いてしまった、痛い、と。つまりそれは、負の感情の一つだ。

欠落した力が発動する。

標的は………。

指から溢れ返った赤い滴が、ポツリと指から落ちる。

左手に大事に持っていたはずのこの子も落ちる。サボテン

気がついた頃には、地面に落ちていたこの子が無様に転がっていた。サボテン

その刹那、私はすぐに理解した。何が起きたのか、何をしたのか、何をしてしまったのかを。

その場にしゃがみこみ、右半分が凹んでしまい歪な形になった新しい子を見る。サボその途端目頭がカーッと熱くなり、無色透明な大粒の

涙が溢れてきた。

ポタポタと涙は頬をつたい、新しい子の表面に慈雨じうのように落ちていく。

「ごめ・・・んね・・・ごめん・・・ね・・・」

数秒間そのまま蹲ひづくまり、悲しい感情のせいで両方の手が震える。原因は、悪いのは今悲しんでいるその感情なのに。奥歯を思いつきり強く噛みしめ、震える手を何とか使い大事にビニール袋に入れ、もと来た道を走る。

門美音子は、暗い暗い路地裏をひたすらに駆け抜ける。

赤いマフラーを首に掛けた、憑乃宮少女はその光景をひたすらに見つめていた。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

早朝。時刻は七時四十分を回った所だ。

今日は朝から雪が降っており、いつも朝練で学校に早く来るクラスの子は、グラウンドが使えず今日は朝練が中止で、部活の子は誰も登校していない。つまり必然的に、今この教室にいるのは私だけだ。

別に私は部活動には入っていない、だったら何故こんなにも早く学

校へ来たのか。いつもならこの時間帯は朝食の真つ最中だ、どんなに気分が良くてもこんなに早く学校へ来るなど、まずあり得ない事である。

ただし今日は違った。理由は至極簡単、どうしても早く会いたい人があるから、どうしても早く言いたい事があるから。

あの子が何時学校に来るなど分からない、だけど私は直感した、必ず会えると。

確証も理論も証拠もない、ましてや直感だなんて、霞ちゃん聞いてたら大爆笑だろう。だけど、今の私にはそれで十分すぎる理由だった。

赤いマフラーを首からはずし、学校指定のスクールバッグにしまうシーンと静まり返った教室、聞こえるのは自分の息遣いと、心臓の鼓動だけ。

ゆっくりと目を閉じ、自分の考えをもう一回まとめる。

そうして、静寂は破られた。

§
§
§
§
§
§
§
§
§

教室の扉が開く音がした。方向からして、前方からだ。

そしてゆっくりと、中に入ってきた人物を見る。

座敷童子。

そこに門美音子がいた。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

門さんは目を猫のように大きく見開いて、困惑と驚愕の混じった表情で固まっていた。

「おはよう、門さん」

静かに、優しく語りかけるように私は門さんに挨拶した。

「え・・・あ・・・おはようございます・・・」

数秒後、何とか現状を飲み込み、声を絞り込むように挨拶を返してきた。

「何で・・・？　どうして憑乃宮さん・・・こんな早くに？」

「さあ？　自分でもわからないけど、ただ何となく、ね」

私の返事を聞いて、さらに困惑していく門さん。

「ちょっと、門さんに話したい事あってさ」

その言葉を聞いた瞬間、門さんの体が僅かに揺らいだ。困惑と驚愕に満ちた表情がみるみる青ざめていき、何かを恐れ入るような、そんな恐怖ともとれる表情になっていた。

「昨日の話なんだけど。私なりに色々考えたんだ」

私の一言、一文字一文字に、問さんの体が反応する。顔を見ると、もうそれ以上言わないでくれ、と訴えているかのように見える。

「私はね、問さん」

「あなたと、ずっと友達でいたいと思ってるよ」

嘘偽りのない、純粹で綺麗な笑顔で、私は言い放った。

）
）
）
）
）
）
）

「……え？」

何秒かの沈黙の後、ふいに問さんは声を漏らした。

まったく違う答えが来るのと予想してたのか、問さんの顔は酷く強張っていた。

「昨日ずっと考えてたんだ。でもまったく良い答が思い浮かばなかった」

「ただね、と私は付け足す。」

「昨日、路地裏にいた問さんを見かけた。そこでね、全部見てたし聞いちゃったんだ、問さんが苦しんで悲しんでいる姿を」

「あそこに……いたの？」

「うん……。私も驚いたよ、まさかあんな所であんなもの見るなんてさ」

だったら……。と問さんが小さく言葉を漏らす

「だったら、あれ見て分かったでしょ？ 私の小さな感情でも他人を傷つけてしまうって事。なのに、あの光景を見といて、それでも私と友達になりたいって言うの？」

もはや開き直ったように、半分自嘲気味に問さんは言い放った。

ただどあれは本当の気持ちではないだろう、自分の気持ちを必死に押し殺して、自分から私を遠ざけるように言ってるだけの演技だ。

「うん、私の答えは変わらない。後は問さん次第」

私は力強く問さんを一点に見据える。その私の目を見て、本気で言っている事に気付いたのか、問さんは小さく消え入るような声で言った。

「……………てる……………」

「そんなの……………きま……………てるよ……………私も……………でも……………」

しゃくり声をあげながら、問さんの顔は少しずつくしゃくしゃになり、昨日見た大粒の涙よりも大きな涙が溢れだしてきた。

「でも、私の側にいると傷つけちゃう。そう言いたいんだよね」

門さんは弱弱しく頭を上下に振り、肯定する。

「それなら大丈夫、今仮定が確証になったから」

え？ と門さんは涙を流しながら私の顔まじまじに見つめる。

私も笑顔で門さんを見つめ返す。

「昨日からちよつと引つかかてたんだ。どうして私の家族に幸運が訪れたのに」

何で、と私は言う。

「私には何も起きなかったんだろうって」

その瞬間、門さんは言葉を失った。

「でもね、昨日の朝、つまり門さんと会った頃は私にも門さんの力が作用した。ハンカチ濡らしちゃったり、教科書を忘れず授業も潰れたしね」

「な・・・なら」

「うん。でも今は違う」

「よく分からないけど、段々と門さんの力が私に作用しなくなってきた」

まるで何発もの雷に打たれたように、大きく肩が揺れ門さんは固ま

った。

「例えば昨日、お母さんは宝くじ三十万が当選した、けどその後私が確認したら千円しか当選してなかった」

「例えば昨日、お父さんは会社で大活躍した、けどその後会社から電話がかかって来て、お父さんの手柄の大半は会社が持ってたって、お父さん個人の活躍はあまり評価されなかった」

「例えば昨日、妹の真衣は子供町内会で希望の絵具セットを貰った。けどその後肌身離さず持ち歩いてたせいで、外に散歩に行った際どこかに置き忘れて、結局見つからなかった」

問さんの目がみるみる見開かれる、あまりの急展開に昨日の私のように今度は問さんがついてこれず、思考がストップしてしまったようだ。

「そして今も」

「……今も？」

オウム返しのように、私の言葉を繰り返す問さん。

「今さっき、問さんは泣いちゃった、苦しくて悲しくて。苦しみと悲しみってことは、つまり負の感情じゃない？　そしてその原因は目の前にいる私。私のせいで泣いたといっても過言じゃないでしょう？　だったらその感情の矛先も私に来るはず」

ここまで聞いて、問さんも悟ってきたようだ。何が起きたのか、何をしたのか、何故何も起きないのか。

「なのに私は今、こうしてここにいる。何も起きないし、何もされてない。門さんが昨日言ってた、私から不思議な何かを感じた、って発言。昨日まではあくまで推測にすぎなかったけど、これではつきりと繋がった」

門さんの目から、また大粒の涙が溢れだし、涙がゆっくりと頬を優しく撫でる。

私は言う。門さんを救うために、欠落した力から解放するために。昨日の裏路地の光景を見て、自分に明滅した時、決めた言葉。

「幸せになるのは、次はあなたの番だよ。門美音子さん」

【五話】『憑乃宮少女と門少女』（後書き）

話の途中で出てきた『白光火蜥蜴』の話はちゃんと内容があったんですが、これ以上長いと読む方も大変だろうと思い、切りました。（本当は本文から脱線しちやいそうだから）

次は後日談とゆうか、何とゆうか、門さんと白光火蜥蜴の店内でのやりとりとか。

門さんのあだ名とか決めたらいいなって思ってます。

つたないお話でしたが、少しでも感想や注意、何でもよいので一言下さると、メチャクチャ喜びます。

【後日談】『門少女と白光火蜥蜴』

あそこで私は不可思議な体験をした。

あの店員は一体何を知ってたんだろう？何を私にしてくれたんだろう？

今更ながら、そんな思いが胸に広がる。

会いたい。

無性にあの店員と会いたくなった。

だったら話は簡単だ。会いに行けばいい。

あの人がいる店はここからすぐ近い、近所である。

私は古びたタンスから灰色のフレンチコートと白いマフラーを取り出し、着衣する。

装備が整ったら、私はアパートの裏手にある裏路地に在る『白光火蜥蜴』はっこう

$$\begin{array}{c} \wr \\ \wr \\ \wr \\ \wr \\ \wr \\ \wr \\ \wr \\ \wr \end{array}$$

自宅は木造二階建ての古いアパート。部屋の中は畳が七畳に、窓と押し入れが一つある。一人暮らしには十分の広さで、さらにはお台所まで完備している。水道の蛇口からは、なんとお湯まで出る。

そして極めつけは破格の家賃である。なんとなんと二万円ジャストとゆう、考えられない安さで部屋を提供していた。

だが、そんな天国のようなアパートの壁面には『コーポ獄堂』ごくどうと大きな字で書いてあって、どうしようもなく不釣り合いでしようがなかった。

大家の獄堂さんは、そんなごつい名前とは対照的に、明るくて常に優しいオーラが体から滲み出てるような、70過ぎのお婆さんだった。

何でも獄堂さんの息子さんは、結構有名な運送会社に勤めている敏腕会社員らしいのだ。毎月かなりの額の仕送りも貰っていて、お金

にはまったく苦勞しないとの事だ。

そんな獄堂さんはお金に苦勞している人、特に若い人を中心に支援をしてあげたいと思い、手元にある毎月まったく使いきれない大金を貯めて、このアパートを買ったそうだ。

だから現在このアパートに住んでいる住民は、大学生や自分のような訳ありの高校生が住んでいる。

だけど家賃がいくら二万円と言えど、自分には家賃や光熱費、生活費などを毎月払う事など出来ない。

だったらアルバイトの一つでもやればいいと思っていたが、お父さんに断固反対された。

ここで一人暮らしするのも本当は駄目だったのだが、私は一週間かけて何度もお願いしてやっとの思いでお父さんから許可を貰ったのだ、これ以上お父さんの意見を拒否するのは不可能だったのだ。

だから必然的に私は今、お父さんから毎月仕送りを貰う事になっている。

でも本当は心の底では、アルバイトをしなくていい理由が出来てホッとしている自分がいる。

何故ならばそれは、私の存在自身にある。

この欠落して力は、ほんの些細なことで発動してしまうのだ、もし私が接客業でもしていざこざにでもなったら・・・考えたくもない。

きつとお父さんもそれが大きな理由だったんだろう、学校以外で人と深く関わるの事はなるべく避けるべきだと。本当なら、学校へ行くのも反対されているのだが……。

結局私は一人で頑張るために来たのに、いろんな人に助けられているのだ。

そんな歯がゆい気持ちを胸にしまい、ドアの鍵を開け中に入る。

「ただいま」

勿論中には誰もいないが、つい言ってしまう。もし『おかえり』と返ってきたら、私はそのまま交番に直行だ。

部屋の中は酷くこざっぱりしていた、とゆうより物が少ないだけだ。ただ単にあまり必要最低限な物以外置きたくないのだが、別に何にも欲しくないとゆうわけではなく、部屋の限度がある以上物があり過ぎて狭い空間になってしまうのが嫌なのだ。

部屋の中を見渡すと、部屋の中央のガラス製のテーブルがある。

そしてそのテーブルの上に、一つの小さなサボテンが鎮座していた。

「お留守番ありがとね針手山^{はりてやま}。さびしかった？」

そう呼ばれたのは、目の前にあるサボテンの事だった。

針手山との出会いは、ここに引っ越した時である。引っ越した際、物の無さに寂しさを覚えた私は、商店街の一角にある花屋さんの店

先にセールス品として売られていた、このサボテンを買ったのだ。

その日からこのサボテンは『針手山』とゆう呼称を付けた。

もはや家族の一員と言っても過言ではない私にとって、この小さな同居人は一つの心の支えである。

部屋に入るなり、そんな小さな同居人の前に正座して座る私。

「ねえ、聞いて針手山・・・・・・・・」

そのまま私は滝のように喋り出した。転校初日の感想、クラスのみんなの対応、今日の出来事とそして、彼女の事を。

傍から見れば、サボテン（しかも呼称付き）に熱心に喋る女子高生は、かなり可愛そうな電波ちゃんだ。

しかし、当然ながらこの部屋には私と針手山以外いない。ドアの鍵は閉まっているし、他に覗かれる場所と言ったら窓くらいだが、ここは二階である。それでいて覗かれていたなら、私はそのまま警察署へ直行だ。これじゃあ、今日一日で何度も警察機関にお世話になってしまう。

一通り話が済んだ私は、少しばかり心が軽くなった。その途端猛烈に喉の渇きが強くなり、水道の蛇口をひねり、水道水をコップへ入れる。

そのまま針手山の元へ向かい、コップを傾け針手山の上から半分ほど水をかける。

「話聞いてくれてありがと、針手山」

私は少し微笑みながら水をあげ、残った水を飲み干す。

くくくくくくくくくくくく

三十分後、私は私服へと着替え終わりボーツとしていた。

だが頭の中は、彼女の事で一杯だった。明日のシュミレーションを何回も繰り返し、その度バツトな結果に気分が沈んでいく。

だがこのまま考えていても仕方ない。よし……。

「外に行つて考えよう……」

結局考えるのだが、少しでも気分転換しないと、明日には心が海底よりも深く沈んでいるだろう。

私は古びたタンスから、灰色のフレンチコートと白いマフラーを取り出し、着衣した。

装備が整ったなら、私は商店街の外れに在る、寂れた公園へ向かうため、外に出た。

くくくくくくくくくくくく

裏路地。

外は太陽が傾きかけ、段々と空が朱色に染まりつつあった。

そんな裏路地は普段より暗く、薄らと怪物が口を開いてるような、そんな不気味さがあつた。

この裏路地は、アパートと商店街を繋ぐ近道で現在通ろつとしてゐる。

一歩足を踏み入れ、私は普段よりも早足で歩き始める。

そんな時、ある建物が目に飛び込んだ。

花屋が一軒建っていた。

いや、建っているとゆうより、狭い空間に無理やり詰め込んだような、建物と建物の間に出来た吹き出物のような印象だった。

でもそれ以前に、私はこの花屋の存在を。

今知つた。

すでに数十回は通つたであろうこの裏路地に、しかもこんな細長い道で、このような異様な花屋を見逃すはずがない。

確かにここは、裏路地にしては少々横幅がある、ちょっとした広場だが、決してお店を建てる所としては適していない。

私はそのまま通り過ぎず、いつの間にかその花屋の店先に立っていた。

謎のお店の存在に私は首をかしげつつも、店の全体図を見る。

ガラス張りのショーウィンドウがあり、そこから何かの花が沢山見えている。この事から、私は花屋として断定しているが、確定はしていない。壁は白で統一され、店先には当然何も並べてなかった。

それもそうか、こんなとこに花を広げるほどのスペースないもんね。

何度もゆつようにここは裏路地だ。店と店の間に出来た僅かな隙間。

そんな場所に店を建てるなんて、もとい花屋を建てるなんて何を考えているのだろう。こんな日光の欠片しか入ってこないし、夏は風通りも少なくじめじめしていて、冬は寒くて乾燥しているこんな場所に建てて、一体何のメリットがあるのだろうか。

それに可笑しなことに、この店には店名が書いてなかった。壁は黒いカビ一つ生えてない純白で、名前を書くスペースならあるのに、どこにも店名が書かれてなかった。

もしかしたら花が沢山見えるだけで、本当は違うお店なのかな・・・？

段々とお店としての存在も疑えてきて、まさに奇妙奇天烈な存在だった。

はたして入ってみてもよいのだろうか？　もしかしたらもしかすると誰かの家だったり？

そんな疑問が頭の中をかけずり回り、無性に興味が湧いてくる。

その漠然としない答えを知りたいとゆう欲求が強くなるのは、そう時間はかからなかった。

結局私は耐え切れず、お店のドアノブを手に取った。

それが花の匂いだと判断するのに時間がかかり、理解できた時には、

々には山のように盛られた花たちがひしめき合っていた。中には見た事のない花なのかすら分らない物もあり、さらに普通ではない花屋だと再認識した。

ガチャッ。

頭に赤いバンダナを巻き、所々茶色く汚れたエプロンを着けた、歳にして20代と言ったところだろうか、恐らくこの店の店員だろう。

「いらつしゃい。また珍しい客だな」

珍しい？ 確かにこんな所にある花屋に入る人は珍しいかもしれないが、そんな意味だろうか？

「まゝせつかく来たんだし、ゆつくりと見ていっておくれよ。品ぞろえには自信があるよ」

「は、はあ」

そう曖昧に返事した私は、あせった風に花達を見つめる。

そんな私のリアクションを楽しむかのように、あの店員さんはニヤニヤしながら私を見つめていた。

そ、そんな風に見られちゃ落ち着いて見れない……。

「どうだい？ どいつもこいつも綺麗だろ？ いやゝ珍しい物珍しい物と探している内に、本当に珍しすぎて誰にも買ってもらえんよ。こりゃ笑えるよな、わっはっはっはっははは」

そう豪快に笑いだした。

何なんだろこの人……。妙に絡んでくるとゆうか暑苦しいとゆうか、性格も随分と男らしいし、やはり店の出す場所もこの人の性格を表してるのだろうか。

「おっと、そんな変な顔すんなって。悪い悪い、つい久方の客でな、テンションがオーバーヒートしちゃった」

「い、いえ、こちらこそすみません。えっと、このお店何とゆうか素敵ですね、いつ出来たんですか？ 私近くに住んでるんですけど、まったく気がつきませんでした」

「ああ、そりゃさつきだ」

「さつき・・・？」

さつき、とは何時の事を表しているのか？ 言葉通り取るなら、まるで数時間前数分前のように聞こえるのだが、それは絶対ありえないだろう。

何せ昨日もこの裏路地を通ったのだ。いくら夜に通って暗かったとしても、気が付かない訳がない。でもそれ以前に、このお店が建設しているところすら見ていないのだ、奇妙とゆうより、不気味に近かった。

「ん？ その顔は『こんな店、こんな場所にあつたかなー？』って顔だな」

「う」

ギクリと擬音は聞こえそうだった。

「凶星か」

店員さんはニタリと笑みを浮かべ、エプロンのポケットから煙草のケースを取り出して、煙草を一本口にくわえてライターで着火した。ここはお花屋さんだ、そんな場所で人体にも花達にとっても有害な

煙草を堂々と吸っているこの光景に、私は注意していいのかためらった。

「ふう〜。あ？ ああいいのいいの。花達は水が必要としている事と一緒に、私も煙草を必要としているの」

ヤニ一つついてない、真っ白な歯を見せながら店員さんは言った。

煙草を吸う仕草はどうも貫禄があり、一種のカッコよささえ感じる。だが威風堂々と吸っているが、やはり店内での喫煙は控えた方がよいのでは……。

「おっと、まだお互いの自己紹介もしてなかったな」

ふと思い出したのか、半分ほどしか吸っていない煙草を、ポケットから取り出した携帯灰皿に入れた。

「自己紹介ですか？」

何故自己紹介？ ここは転勤してきた職場や学校ではない、ただのお店なのだ。コンビニに入って、一々店員さんに名前を紹介するなんて事はない、それともこのお店の、あの人の仕来たりなのだろうか？

「私はこの店『白光火蜥蜴』の店長、灼色焰だ」

ただの、と続け。

「火蜥蜴さ」

そう、ヤニっかない真っ白な歯を見せながら彼女は。

灼色焰は暑苦しく言った。

「ようこそ、私のお店へ。同じ人間じゃない者さん」

【後日談】『門少女と灼色焰』

灼色焰は薄く、クツクツと笑った。

「う、あ・・・え・・・？」

私は完全に言葉をなくし、落ち着きのない声を上げるしか出来なかった。

「なーに、簡単な話さ。あんたがこの店に来れた事が、あんたの存在を裏付けてるんだよ」

あんたの存在、その言葉だけで私はさらに落ち着きをなくす。

「ま、混乱するのも訳ないか。特にあんたは色々と抱えてそうな顔してるしな、まあ何も抱えてない奴なんていないか。特に俺達みたいなやつらはさ」

俺達、含みのあるこの言葉。つまりそれは、私の本当の姿を知っているってこと？

「わ、私が座敷童子って事を・・・知ってるんですか？」

「ん？ あゝあゝあゝ。あんたって座敷童子なのか、成程ねえ。だからあんたの見た目ってまんま人間なのか」

何も知らないような、そんな素の反応がかえって来た。そんな反応が帰ってくるとは、夢にも思いもしなかった私は、さらに思考の迷

宮が入り組んでしまった。

「そんで？ あんたの名前は？」

私の自己紹介の催促に、混乱しつつも簡潔に答える。

「門、美音子です」

「門い？ あんた珍しい名前してんな」

あなたも人の事言えない気が……。

「座敷童子の門美音子か………。うん………うん……よし！」

何が『よし！』か分からないが、灼色さんは何かを考え始め、数秒もしない内に手をポンと叩いて『よし！』と言った。

「あんたの名前、まどろっこしいつつか、呼びにくいつつか、書きにくいつつか、まあそんなわけであんたのあだ名は」

ずばり、と灼色さんは続け。

「『ぬき子』で決定だ！」

理由の最後で出てきた『書きにくい』とゆづのがよく分からないが、

とにかく突然の私のあだ名が一人で決議、決定、発表され、私は何も言えずポカーンとしていた。

「何だその顔？」「ぬき子」じゃ不満か？でも他に思いつかないしなあ……。「かん子」いや……可愛くないな……。「ぬつきー」んー……何か仲間はずれみたいだな……。」

灼色さんは私のあだ名を色々と吟味しだし、私はすでにあだ名に対して口出し出来なくなっていました。

「やつぱり『ぬき子』が一番だな、うん。じゃあぬき子、これから
もよろしく頼むな」

差し出された手は、勝手に私の手を握り、何の理解もしないままよろしくやってしまう協定を、私は灼色さんと結んでしまった。

S
S
S
S
S
S
S
S
S

数十分後。

今聞いた灼色さんの話を要約すると、こんな感じである。

まずこのお店が出来たのは、ついさっき。この『さっき』とは、時間で表わすと二時間ほど前とゆう事らしい。

私の推測通りこのお店はお花屋さんで、店先に何も並べてないのはただ単に場所がないから。

店員さんは灼色さんだけで、さっき出来たから店員がいないのではなく、雇える人がいないからだ。

雇えない、とは別に人件費を払うお金が無いとゆう意味ではない。
これには人には言えない大きな理由、つまりこの店の存在などの意味も兼ねていて、全ての謎が関わっている。

その理由とは、この店と灼色さんが非現実的な存在だから。
オカルト

私が疑問に思った、この店の立地場所と突然の店の出現が、この理由で解消される。

灼色さんによると、この店は非現実的な存在が作り出した、非現実的な店、とゆうことらしい。つまりはこの現代のルールには適用されず、この異常な立地場所と店の出現が可能になる。
オカルト

店主の灼色さんも、勿論非現実的な存在。オカルト 私と同じく見た目は人間でも中身が違う。

火蜥蜴、灼色さんは自分の事をそう呼んだ。しかし火蜥蜴なんて言葉、私はファンタジー小説やゲームなどでしか聞いた事がないので、現実では一体どんな姿なのか皆目見当もつかない。
サラマンダー

火蜥蜴と聞いて世間一般の人がまず連想するのは、まずは名前の通り炎を纏った蜥蜴だろう。あとは擬人化されて、二本足で立つ半蜥蜴のような者だったり、精霊のような霊的な存在だったり、大体これくらいだろう。

この知識がどこまで通用されるか分からないが、今私の目の前にい

る灼色さんの姿は、少なくとも擬態しているんだと思う。

このお店は先術話したように、そこに在るようでそこに無い、非^{オカ}現実^{ルト}的な建物。このお店を見つけ入る事が出来るのは、私のような非^{オカ}現実^{カルト}的な存在か、灼色さんの方から招くしか方法はない。だから灼色さんは、私の正体は何なのかまでは分からなくても、このお店に入った事から私をただの人間ではないと分かったのだ。

そして私はある一つの事に気付いた。

それは。

この出会いは、私の非^{オカルト}現実的な存在への初コンタクトなんだと。

私のような存在がいるのだ、他にも色んな非^{オカルト}現実な存在がいてもおかしくない。いるなら会ってみたいと何度も思ったものだ。

そしてそれが今現実を起こっている。

カウンターに座り、こちらを見つめながら何が面白いのかニヤニヤしている灼色さんに、私は話しかける。

「あの」

「ん、何だ？　ぬき子」

「そのあだ名、やっぱり決定したんですか……」

「ああそうだ」

間髪いれず答える灼色さん。

当たり前だろ？　みたいな顔で答えた灼色さんは、それなりにこの愛称？　を気にいつているようだ。

「まあいいじゃねーか、あたしが他人にあだ名をつけるのは一つの愛情表現の一種だ。それにぬき子だってまんざらじゃない顔してるじゃん」

「え？」

自分からは勿論見えないが、自分の顔が笑っているのが表情筋の感覚から分かる。

今灼色さんに指摘されるまで、まったく気が付かなかったが、どうやら私はいつの間にか顔がニヤけていたようだ。

何だろう、この感覚。

他人の心にズカズカと入ってくる、と言ったら印象が悪いが、灼色さんはまさにそんな感じ。

赤の他人だろうか関係ない、ズカズカどころか土足で相手の家に入るような、相手の意を気にせず話しかけてくる灼色さんは、今までの私にはまったく縁のなかった種類の人だ。

他人の中身などは気にしない、私を恐れず人として接してくれる、私に愛称としてあだ名を付けてくれる、私が出たことのない理想の人。

灼色さんは、そんな私の理想の人なのかもしれない。だから顔も自然にニヤけるのかもしれない。

「そう・・・ですね。気にいりました、そのあだ名」

「はは、当たり前だ、何せあたしが直々に付けたもんだからな」

二人の人間じゃない者同士は笑いあった。

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

また来る事を約束し、あだ名を付けてもらったお礼に私は一つサボテンを買い、店を出た。

まさかこの出会いが、明日にあの彼女に私を救ってくれるきっかけになるなんて、夢にも思わなかった。

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

現在、冷たく薄暗い路地裏に私はいる。

目の前には真っ白で壮麗なお店が建っている。しかし、店の外壁

には店名が書いておらず、小さなショーウィンドー以外なにもついてなく、まず本当にお店なのかどうか根本的な所から見直してしまう。

そうして私は、そのままお店なのかも分からないお店に入る。

中に充滿していた花の誘惑な匂いが私を突き抜け、開いたドアの隙間に流されていく。

「よう、いらっしやい」

「こんにちは」

煙草を吸いながら私に挨拶してきた人に、私は笑顔で応える。

「ん？ 何だーその顔。何かいい事でもあったのか？」

「あゝ、顔に出てます？」

「そりゃーもう。そんな幸せそうな顔されると、こっちまで幸せになっちゃうよ」

クツクツと笑いながら、灼色焰はそう言った。

「あはは」

「ふふ」

人間じゃない者同士は、昨日よりも幸せそうに笑った。

【後日談】『門少女と灼色焰』（後書き）

はい、これにて後日談が終わりました。

ちよっと時系列が分かりにくと思うので、ここで書きますと。

最後の灼色さんとの会話は、第五話の次の日の話です。

無事、門さんのあだ名も付けられ満足です。ここまで読んで下さった人に最大級の感謝を！

【六話】『憑乃宮少女と鎧騎士』（前書き）

ご無沙汰ぶりです。投稿がほとんど滞っていましたが、なるべく早めに投稿を続けます。

もし、この作品を待っていた方がいたならば大いなる感謝と謝罪を込めて完結を目指したいと思います。

【六話】『憑乃宮少女と鎧騎士』

一月某日。

今日は普段よりも一段と寒い、カラカラの空気が漂う日だった。

見慣れた朝のニュース番組で『今日は全国的にカラツとした、曇り空の一日になります』と言っていたが、まさかここまでとは思わなかった。

「は、肌が割れて……新大陸が！」

家を出る前にニベアを塗ってきたが、これじゃ半日ももたないであろう。少なくとも目的達成までは耐えてほしい。

冷たい向かい風に負けずに、私は足早に目的地へと足を運ぶ。とりあえず頭の中でこれからの事をシュミレートしながら、確実に歩を進めていく。

だが、不意にその歩みが止まってしまった。

いや、止まらざるを得なかった。

今私が歩いている場所は、住宅と住宅に挟まれた細い一本道。両脇にコンクリートの塀があり、どぶ板がズラリと向こうまで続いている。

る。車が一台通れるくらいの狭い道だ。

そんな道中で私は立ち止った。

私から前方数メートル先。薄汚れた電柱に寄りかかる様に座っている人がいたからだ。

いや、正確に言えばなんだろう。アレを私の知る生き物の言葉にするなら『人』だ。

しかし、この場合にそぐ合つボキャブラリーが私にあるか分からないが、一言。

「騎士？」

ポツリと私は呟いた。

*

何とも珍妙奇天烈でいて、摩訶不思議なこの場にいるのは、幸か不幸か私だけだった。

立ち止まってから約10分間。肌の耐久度は徐々に下がり、掌は冷たくなり体温も奪われていた。ドライアイになったみたいに瞬きをパチパチと繰り返し、ただ目の前の不審者に視線を送る。

私は手に持ったコンビニ袋から、買ったばかりの150mlペットボトルを取り出す。そして、恐る恐る不審者の元へ近づく。何故ペットボトルを取り出したかと訊かれれば、上手くは言えないが、きっと己の自己防衛が勝手に働いた結果だろう。

不審者は地面に伏すように座り込み、頭の兜が頂垂れている。少なくとも本物の鉄で出来ているのは見て分かるため、私の左手に持つペットボトルの物理能力では歯が立たないだろう。

頭に被った兜は日本の戦国武将が被ってるようなものではなく、西洋の騎士が被っているよう鈍色のフルフェイスの兜だった。体の甲冑もとても大きく、手から足先まで完全に鎧が着込まれており、生身が出ている所は皆無だ。

あまりの重さに耐えきれずに、ここで力尽きて座り込んでしまったのだろうか？ いやいやそんな馬鹿な。

それ以前に甲冑を身に纏っている時点でおかしいではないか。もしやこれはTVの撮画なんだろうか？ しかし、近くにはカメラもスタッフらしき人もいない。

完全なリアルが目の前にあるのだ。背中に嫌な冷や汗がダラダラ流れる。自然と過呼吸になり、固唾をのみ込む音が聞こえてくる。

ここはあえて救急車を呼ぶか、正攻法に警察を呼ぶか、逆に消防を呼ぶか。

一介の女子高生の私には判断の付けようがなかった。このような場面での対処法も、今までも習った事覚えはない。

「う……ん」

突然、目の前数十センチの所で不審者はうめき声をあげた。声から判断するに、中の人は男性のようだ。

畏怖の念を抱きながらも、私は勇気を出して一言言った。

「だ、大丈夫ですか？」

「………」

反応はなく頭は垂れたままで、こちらの存在に気付いてないのかもしれない。

私は残った勇気を完全に消費させ、更に不審者の元へ近づきペットボトルを逆手に持ち、兜の先端を弱くトントンと叩いた。

「……ん……が？」

もそり、と兜が揺れた。私は慌てて彼の元から遠ざかる。

次に、垂れていた頭がついに持ち上がり辺りをきよろきよろと見渡し始めた。当然私の姿が目視出来たはずなので、兜の目先は私の顔で止まった。一体どこの穴から私を見ているからは分からないが、

強い視線を感じる事は出来た。

「もし、そこのお嬢さん」

渋くそれでいて若い声が聞えた。それが目の前の彼の声だという事に数秒気付かなかった。そして私は、話しかけられてしまった。

「な、なな何でしょうか？」

引きつった顔を向けながら、私は独特の身構え方で言葉をかえした。

「この近くに灼色しやくしきと言う人物が住んでるはずなんですが、何か心当たりはありますか？」

予想のほか丁寧な言葉で彼は要件を言いだした。私は混乱しながらも頭の検索エンジンに『灼色』と言う言葉をかけてみる。

「す、すみません知らないです！」

恐る恐る私は正直に言った。起こしたのは私だが、一刻も早くこの場から解放されたい一心だった。

「そうですか・・・ありがとうございます」

彼は丁寧にお礼を言うと、ついに手を地につけ起き上った。立ちあ

がると身長は2mはあるだろうか、私は首をだいぶ上にあげた。

そのまま彼はこちらに一礼し、ガチャガチャと五月蠅い音をたてながら私が今来た道を歩いて行ってしまった。

「パ、パンゲア」

新大陸を発見したような驚きの出会いに、私は一人呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2604j/>

憑乃宮少女の現代《モダン》

2011年10月5日19時48分発行